

## ひきこもりソーシャルワークとピアスタッフの実践的価値

### ーピアスタッフの揺らぎと協同的關係性ー

○ 立命館大学大学院／日本学術振興会特別研究員 岡部茜 (8265)

キーワード：ひきこもり・ピアスタッフ・若者ソーシャルワーク

#### 1. 研究目的

今回の報告では、若者ソーシャルワークを検討するために、ピアスタッフの実践的価値の検討を切り口として論点を提起する。なぜなら、ピアスタッフの存在は特に協同的な実践の構築へと向かう一つの出発点になり、若者ソーシャルワークにおいて非常に重要な論点を提起できると考えるためである。ここでは、若者ソーシャルワークにおけるピアスタッフの重要性とともに若者ソーシャルワークと協同的關係性に関する議論を深めたい。

ひきこもり支援実践の領域では、特に2010年以降からピアスタッフの実践や養成に注目が集まっているように思われる。また、2013年度から厚生労働省がひきこもり対策推進事業の拡充の一環として、ひきこもりの家族や本人などがピアスタッフとして活躍することも視野に含めた「ひきこもりサポーター」の養成・派遣事業を推進し、それ以降、より一層全国各地でピアスタッフの養成が取り組まれている。

しかし、「ひきこもりサポーター」が無償に近い活動人員として期待されていることや、ひきこもり支援においてピアスタッフの実践的意義や役割に関する議論の不足から、ピアスタッフを地域の安価で手軽な労働力として不安定な位置に位置づけ、都合よく“使役”し続ける構造を生んでしまいかねない。ゆえに現在、ひきこもりソーシャルワークにおけるピアスタッフの位置づけは大きな岐路にあると言えよう。これまでの先行研究整理や新たな調査分析などによって、ひきこもりソーシャルワークの視点からピアスタッフの実践的価値を明らかにしていくことが喫緊の課題となっている。そのため、本研究では、ひきこもりソーシャルワークにおけるピアスタッフの実践的意義がどのような点にあるのか、を明らかにすることを目的とする。ここでの問いは「ピアスタッフの実践的価値はどこにあるのか」である。

#### 2. 研究の視点および方法

本研究では先行文献の整理からひきこもりソーシャルワークにおけるピアスタッフの議論を整理するとともに仮説と分析視点を提起し、インタビューの分析を行なう方法をとった。先行研究整理においては、ピアに関する簡単な整理とひきこもりソーシャルワークでのピアスタッフに関する論考を整理し、「実践を展開する關係性を支援一被支援の關係性から協同的關係性に轉換させる基点を提供する点にあるのではないか」という仮説を立てて分析を試みた。また、インタビュー分析においては、実際に現在ピアスタッフとして実

践を行なっている6名のピアスタッフのインタビューデータから、特に彼らの揺らぎに注目して実践的意義を検討した。

### 3. 倫理的配慮

インタビュー時には、そのインタビューを開始する前に調査協力者に、研究内容について文書・口頭で説明し、協力者のプライバシーや人権が損なわれないよう配慮することを伝え、研究者と協力者の双方に一部ずつ用意した「研究倫理遵守に関する契約書（調査承諾書）」にサインを得た。

### 4. 研究結果

まずピアスタッフの語りからは、いくつかの揺らぎが相互に関連し、支援—被支援関係への違和感と生活者意識が高まることで協同的關係性への志向が生じていると考えられた。その揺らぎとして、今回のピアスタッフの語りからは「自己との向き合い」「立場の曖昧さ」「元当事者としての視点」の3つが析出された。また、ピアスタッフは揺らぎつつも、揺らぎを抱えるがゆえのピアスタッフとしての実践的価値を認識し、スタッフである、という意識がさらに揺らぎながらの現実の実践との折り合いを支えているように思われた。さらに、この揺らぎが相互連関することによって高まった「支援—被支援関係への違和感と生活者意識」が「立ち位置の模索」を生じさせ支援—被支援の關係性ではない新たな關係性を模索する姿を読み取ることができた。そして、揺らぎのなかで「新しい実践枠組みの模索」を行い、支援実践の構造を生活創造の協同的過程に組み立て直すことにより、既存の支援—被支援関係を乗り越えようとする動きが見られた。

### 5. 考察

上記の結果から、ここでは特に、ピアスタッフの議論から見えてくる若者ソーシャルワーク論における論点の検討を行なう。論点としては、(1) 若者観の転換と若者ソーシャルワーク、(2) 若いプロスタッフのソーシャルワーカー養成に関する議論の2つである。

まず(1)では、現行の若者支援政策や社会的風潮のなかで若者が問題化され、支援の客体に位置づけられる傾向にあることをどう乗り越えるのが課題となる。しかし分析結果からは、協同的關係性への力動がピアスタッフの揺らぎから生じており、それが現行の政策や社会的規定を乗り越え、若者が主体者となっていく実践を構築する一つの基点となりうるということが考えられた。若者ソーシャルワークが、ソーシャルワークの価値や倫理に基づき、実践を形成する一人の主体として、そして生活主体として若者を位置づけ、若者ととも政策や実践のあり方を人権意識に基づいて変革する実践として具現化していくために、ピアスタッフの活躍や協同的關係性は重要な実践の構成要素となると考えられる。

次に(2)では、専門資格を持つ若いプロスタッフの揺らぎをいかに保障するのが課題となる。ひきこもり経験を持たない若いプロスタッフにも、ひきこもる若者が葛藤を感じざるを得なかった社会で青年期を送り、共通した葛藤を抱えている者が少なくない。彼らの養成はピアスタッフの揺らぎや養成の検討に学ぶ点が多い。